

ジュエルス・ストラトス～宝石の海に浮かぶ無限の願い

カオスザイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の天災が開発したマルチフォームパワードスーツの欠陥により世に広がった女尊団卑思想で混沌と化した世界。

出来損無いの烙印を押され見捨てられた拳句に化物の体と化してしまった少年はある組織に拾われた。

彼は些細な願いすら守る為に世界と戦う決意をする。

目 次

プロローグ & キャラ設定

プロローグ

1

第一章 願いの守護者と I S 学園入学編

E P I 「我がカルテル」

5

E P II 「願いの守護者と予想外 前編」

11

E P III 「願いの守護者と予想外 後編」

16

E P IV 「願いの守護者と入学、クラス代表決定戦 前編」

22

E P V 「願いの守護者と入学、クラス代表決定戦 中編」

28

E P VI 「願いの守護者と入学、クラス代表決定戦 中編PART II」

33

E P VII 「願いの守護者と入学、クラス代表決定戦 中編PART III」

36

E P VIII 「願いの守護者と入学、クラス代表決定戦 後編」

40

E P IX 「願いの守護者と予期せぬ再会 前編」

48

プロローグ & キヤラ設定

プロローグ

S i d e?

「ぐつ!?…」

なんだつてこんな事に…俺の名は織斑 一夏。

家では厄介者、疫病神扱いされ、欠陥品のパワードスースであるISが登場してからもずっと他人には出来損無いの烙印を押され、心の底から信頼出来る者は指折り数える程しかいなかつた俺の人生。

糞兄貴に言われて嫌々ついてきたまではいいがまさか姉の世界連覇を止める為に自分が誘拐されちまうとはついてないな…俺も誘拐犯も…。

「俺なんかを誘拐したのはミスだつたな…やるんだつたら兄貴の方にするべきだつたぜ? 俺は出来損無いだからな…」

「ああそうかいならお互い来世に期待しようぜ」

自分で言つて普段なら悲しくなつてくる筈なのだがようやくこの理不尽な世界から解放されると涙が一滴も流れなかつた。

「まあちよつと待てよ。

此奴も腐つてもあのブリュンヒルデの弟だ。

他に何かしらの商品としての価値はある筈さ」

「それもそうだな。

よし、坊主こつちに来い!」

「…」

…その筈だつたのに誘拐犯一味の一人がしてきた提案により俺は何処かの研究所に売り飛ばされてしまつた。

まだ俺に惨めな生き地獄を続けるとでもいうのか…。

「ぐああああー!」

それからとというもの日々、下種な科学者達による実験により俺はより一層狂わされていった。

「じ、実験は成功だ! 我々の未来は明るいぞ!」

俺に施した実験が成功したと科学者達は飛び上がって狂喜していた。

「何が明るい未来だよ…地獄の間違いだろ？」

そう思いながら彼等を睨みつけていると

ドーン！と突如凄まじい爆音が鳴り響く。

「な、何事だ!?」

「部長！奴等が此処に攻め込んで来たようです！」

「何イ!?折角実験に成功したという時に…ええい！なんとしてでも迎撃し此処を死守しろ！良いな?!」

「は、はい！…」

何者かにこの研究所を襲撃されたらしく武装した研究員達は慌ただしく迎撃に出て行つた。

「…ウツ!?…」これは…」

その直後、俺は激しい頭痛を感じた。

先程まで行われていた実験のせいか？嫌、それだけではない…何かが俺を呼んでいる気がする…。

俺はそんな気をしてフラフラとした足取りで歩き出していた。

「しまった!?成功体が逃亡してしまっているぞ！オイ、何をしている？早く奴を捕獲しろ！」

「チツ…」

がすぐに奴等に見つかってしまい必死に逃げ出そうと試みるも足下がおぼつかない為咄嗟には動けずにいた。

「撃てー！」

「しまつ!…」

放たれた銃弾に俺は恐怖し目を瞑る。

すると不思議な事に痛みは襲つてこなかつた。

「はあはあ…これだけの銀を撃ち込めばいくら成功体といえども満足には動け…なんだど!…」

「え?…」

それ所かとても不思議な感覚を感じていた。

リーダー格の男も驚きを隠せないといった表情で立ち尽くしてい

た。

「一体何が？…そう思つて目を開けると…

「!?」

「グアアアアーー!!」

紫色の綺麗な翼を持つ機械仕掛けの龍が俺の目の前に現れ視えない壁いわばバリアらしきもので銃弾を防いでくれていたのだ。

「お前は…俺の味方なのか？…」

「グアー！」

俺の声に答えるかの様にその龍は高らかに咆哮していた。

「ひ、怯むな！たかがジュエルガイスト一匹如きだ！残りの銀を奴に集中しろ！」

「は、は！」

男はこれでもかといわんばかりに龍に向けて銃弾を放つてくるが全てバリアに弾かれていた。

「こ、こんな馬鹿な事が！?」

「グアー！」

「そうだな…まずは俺を助けてくれ！」

「グアアー!!」

「うわあああー！?」

再び俺の声に答えた龍は咆哮を上げたかと思うと翼を広げ歯車を象った弾丸を防衛員達に向けて放つた。

「さて、どうしてくれようか…」

「ひ、ヒイ!?た、助けてくれ！」

見苦しく命乞いをしてくる残つた男をどうしてやろうかと模索していたその直後、ドゴーン！と再び大きな音が響いたかと思うと付近の扉が破壊された。

「アゲイル・ベイツその他一味！お前達は既に組織の裏切り者として手配されている！おとなしく『我がカルテル』から奪い、持ち去つた魔石を全て返却するんだ！さもないとあらゆる手段を以て肅清する！…つて何だこの光景は？」

「…」

なんだか自分でも訳が分からぬ状況になつたが突然現れた男の目に入つたら間違ひ無く面倒事に発展すると思つた俺は早々に逃げる準備をしようとした。

「ムツ!? アレはジユエルガイストじやないか!」

「待つてくれ! ソイツは敵じやない!」

「チツ! お前がジエムマスターか!?」

「話を…聞いて…くれ…」

「お、 おい! …」

すぐに気付かれてしまい仕方無く応戦する事にした…のだが体力の限界を迎えた俺は倒れてしまつた。

第一章　願いの守護者と I.S 学園入学編

E.P.I 「我がカルテル」

S i d e 一 夏

「…はっ!?…」

目覚めた俺の目に飛び込んできたのは紛れも無い病棟だった。

「お? ようやく目が覚めたようだな無事で何よりだ」

「もう! 武流お兄様のアホ! 保護対象と戦闘して何かあつたらどうする気だつたのですか!」

「あ~…スマンスマン!」…どうやら指令がよく届いていなかつたみたいだ」

「いつも先走つて他人のせいにするのはお兄様の悪い癖でしてよ! それに謝罪するなら私ではなく其方の方にでしよう?」

「この度は申し訳ございませんでしたわ…ほらお兄様も…」

「ああ…あの時は悪かつた!…この通りだ!」

「…」

目の前で寸劇を繰り広げるあの時倒れた俺を此処に運んできたんのであろう男と青髪の美少女が俺に謝罪してきた。

「あ、ああ…別に良い…」

「おつと自己紹介がまだだつたな。

俺は草原 武流だよろしくな!

でコイツは俺の同僚の…」

「私は天原 すせりと申しますわ!」

お兄様共々よろしくお願ひ致しますわね」

「俺は…」

先に名乗ってくれた武流と天原さんに対して俺も名乗り返そようとすると躊躇してしまう。

「い、一夏です。苗字は訳あって名乗りたくありません…」

「そうか…だつたら深追いはしないさ」

「そうですわ」

「…」

二人はそう言つてくれた。

「つとそだ一夏、お前が巻き込まれた件について我が組織のトップであらせられるオッペンハイマー卿がお呼びなんだ俺についてきてくれ」

「ああ、分かつた」

武流にそう促された俺は彼についていった。

其処では

「私がこの「我がカルテル」のトップを務めるオッペンハイマー卿である！」

「…率直に言つて帰らせて頂きます」

「まあ待て」

俺の中の何かが彼等に対して警鐘を感じ取つたので早々に退散を試みるがすぐに静止される。

「そのままの状態で此処を立ち去るのもお主の自由だが…それでもいすれはお主の体に宿わされた力によつて死ぬぞ？
誰か鏡を持つてまいれ！」

「?…」

オッペンハイマー卿と名乗る者に促された構成員が持つてきた鏡を覗いてみた俺は驚いた。

自身の両目が紅くなっている事に。

「己が一体どうなつてしまつたのか？という顔だな…良いだろう武流、彼に説明してやるが良い」

「は！」

オッペンハイマー卿に促された武流が俺に説明してくれる。

「という事だ分かつたか？」

「…ああ」

まず、此処「我がカルテル」という組織は「魔石」と呼ばれる高純度を誇りしかも願い事を叶える宝石の全てを管理しているジュエリーシンジケートの実質のトップらしい。

つてどんな所に来てしました俺！

次にその魔石にはある存在が封印されている。

それが「ジユエルガイスト」と呼ばれるモンスター、そしてそのジユエルガイストを使役する人間をジエムマスターと呼ぶ。

だがそのジユエルガイストの中には世界を滅ぼしかねないといわれる力を持つ魔王級のモンスターを封印するキングストーンというのもも存在する。

その力すらも使役するジエムマスターはハイマスターと呼ばれ数える程しかいないらしい。

武流とすせりもそれに値する実力の持主らしい。

という事は…俺を助けてくれたあの機械仕掛けの龍がジユエルガイストという事になるな。

武流達はかつて組織を裏切った者の残党を始末する為に出張つてきていたらしい。

だけど一つ疑問が残る。

「俺に施された実験は一体何だつたんだ?…」

「それは俺から説明するとしよう」

「八尋! 戻つていたのか!」

突然、銀髪の青年が横から現れた。

「ああ…残党を捕らえたと聞いてね…私は叢神 八尋という。

それに…確かに一夏君だったねこの度は君にはすまない事をしてしまつた…かつて私が率いていたとはいえよもやあのような悪魔の研究に手を借しているとは思わなかつた…」

「なつ!…」

俺は八尋さんの言葉に驚いた。

「ああ、その事も含めて詳しく話をしようか」

そう言つて八尋さんは語り出す。

かつて八尋さんが我がカルテルに反旗を翻しわざと一つの街に魔石をバラ撒いて混乱に陥れた事を…。

それはその中でジユエルガイストと人間のハーフである「緋赤眼」の子供達を守る為に王になる力を手に入れる為であつた。

一般人をも巻き込んだ長い戦いの末に武流と八尋さんは和解し八

尋さんも我がカルテルへと戻つてきてくれたそうだ。

だがその上で払つた犠牲は大きかつた。

「八尋…黄泉の事は…」

「良い…彼女の涙に気が付けなければ私ももう少しで最大の過ちを犯す所だつたのだ…」

黄泉さん…かつて裏切つた八尋さんに付き従つていた少女で最終決戦で武流の使役する魔王級ジュエルガイスト、黒龍王・シグルトバルムの攻撃から八尋さんを庇つて死んでしまつたらしい。

だけど又もやここで一つ疑問が湧き出た。

「でも魔石で願い事が叶うのならその人を生き返らせられるんじゃ？」

「…」

「え？…」

俺の一言に武流達は重い空気になつっていたのを感じた。

「一夏、言い忘れていたけど我がカルテル内では死んだ者を生き返らせる願いを叶えるのは強く禁じられているんだ。

それにも相応の理由があるんだが…」

武流が重い口を開き理由を説明する。

願い事を叶えるには使用者の「運気」を消費する。

これには個人差はあるがそもそも…人の生き死に等に対する願い事は多大な運気を消費する事になる。

運気を使い果たした人間は不幸にみまわれて死に至るらしい。

それに魔石で願い事を叶えると世界の空間に綻びが生じる。

その綻びから魔石に封印されていないジュエルガイストが世に溢れ出してしまいかねないからという事だ。

それも願いの強さに比例するという…。

「話が大分逸れてしまつていたな…一夏君、君は恐らくアゲイルの奴が行つていた「人工緋赤眼」の研究による成功例となつたのだろう」「俺が半分化物みたいな体に？…嘘だろ！…」

とても信じられはしないが彼等を信じるしかないと。

「一夏、君のその力は恐らく我がカルテルの回収対象にあつた「パーク

ルダーク・クリスタル」の力を抽出して作られたものだろう……そこでオッペンハイマー卿よろしいでしようか？」

「うむ、良からう！…どの道そうせねばなるまい？」

「ええ…許可を頂きありがとうございます！…では…一夏ついて来て

「あ、ありがとうございました！」

武流達と俺もオッペンハイマー卿に礼を言つてまた別室に連れられていった。

「今からコイツお前の物だ触れてみると良い」

「ああ…」

武流が持つてきた紫水晶「パープルダーク・クリスタル」に触れる
とあるヴィジョンが頭に浮かんできた。
この感じは…：

「お前なのか！…よし来い！」

そう念じると水晶が眩い輝きを放ち目の前を照らす。
すると…ポン！

「ン？…」

「キュウー？」

輝きが止むとやけに小さい体をした紫の翼を持つ龍が俺の肩に
乗つっていた。

あ、アレ？…こんなんだつたけコイツつて？

「どういう事だこれは？」

このジエムには新たに確認された七体目の魔王級ジュエルガイスト
が封印されているつて話だつたが…

「私にも分かりませんわ…」

「だけどコイツからどことなく面影は感じるな…」

武流達にも予想外の事だつたようで混乱する。

だけど俺にはあの機械龍の面影をコイツから感じた。

「ふむ…これは俺の予想だがこのジュエルガイストが封印されていた
魔石に秘められていた力の半分がその少年にあるのが原因なんじゃ
ないか？」

聞けば奴等は人工緋赤眼の実験を行つていたという事だしな」

「ラウルさん！貴方もいらしてたんですね！」

「貴方は？」

「おつとそだつたな。

俺はオーギュスト・ラウル、我がカルテルのしがない一幹部さ」
氣さくな口調で話しかけてきた男性ラウルさんは言葉を続ける。
「少年、お前さんのその人工緋赤眼の力の根底はその魔石から抽出さ
れた物だ。

そのせいでそのジュエルガイストのパワーが安定せずにそんなみ
みつちい姿になつちまつたて訳だらうな」

「…まさか…」

俺の事を助けてくれた時に力を使い切つたせいか…。

「ま、かといつて本来の姿に戻せないつて訳でもない。
だがそれには相応の覚悟が必要だぞ少年」

「…どうすればコイツを元の姿に戻せるんですか？」

「良い目をしてきたな…話は決まつた！」

俺と武流でお前さんを一人前のジェエムマスターに育ててやる！

お前さんが力を制御出来るようになればジュエルガイストも相応
に応えてくれる筈だ！

お前さんの名は？」

「一夏です！」

俺は自分の理不尽な人生に対し訪れた死を受け入れようとも思
いました。

だけど、俺は…それ以上の理不尽からほんの些細な願いも守りたい
んです！

どうかお願ひします！」

俺は決意を表明し頭を下げた。

「よし、決まりだな！」

かくして俺の修練の日々が始まるのであつた。

EPⅡ 「願いの守護者と予想外 前編」

S.i.d.e一夏

「ふう…」

あの日二年前に俺はある組織の者達に救われ新たな決意を胸にその組織「我がカルテル」に正式に入団し新米ジエムマスターとして修練・任務をこなしていた。

まあ、修練は文字通り地獄と困難を極めたが…笑顔で月花鳥・白鳳の火炎の舞を浴びせようとしてくるすせりさん怖ええ！

軽くトラウマ物だよありやあ！

「ガ！」

「お？ お呼び出しかダール？」

俺の相棒となつた魔王級ジユエルガイストであるギアパー・ブルマシンダーズドラゴンことダールが俺を呼びに飛んできた。

今はこの小さい姿ではあるが俺がこの二年間の修練で培つた力を発動させれば本来の巨大な機械龍としての姿と力を取り戻せる。

「ガウ！」

ダールの返答に対し俺は駆け出していた。

ではいきますかね。

「我がカルテル「卿の間」」

「お呼びでしようか？ オツ・ペンハイマー卿」

既に組織のトップであるオツ・ペンハイマー卿に呼ばれていた俺を仲間として受け入れてくれた武流やすせりさん、ラウルさんといったメンバーもいた。

全員頭を下げながら敬礼する。

「うむ、ハイマスターの称号を与えた一夏君にもそろそろちゃんとした任務をと思つてな。

また新たな魔石の反応が確認された地点が判明したのでな」

「！」

その一言に俺達は一層気を引き締めた。

「その地点といいますと？」

「それなのだがちと問題があつてな…先日本来ならば女性にしか動かせない筈のＩＳを動かした男性操縦者出現の報道は皆の者も知つておる筈」

「…」

オツペンハイマー卿の言葉に俺は顔をしかめそうになつた。

俺の元糞兄貴である織斑 依秋がなんとＩＳを動かしその前代未聞なニュースが世界中に瞬く間に広がつていつたのだ。

だけど俺だけはかつての自身の立場をより一層悪化させたＩＳに對して嫌悪感しかないのでどうでも良い事だと思つていたのだが…。

「一夏？」

「…ああ、そういうえば皆には俺の過去を話していなかつたよな」

武流に心配された俺は意を決して彼等に以前の事を話した。

「…お前さんがまさかブリュンヒルデの弟の内の一人だつたとはねえ

…」

「アゲイルの奴もそこに価値を見出していたという事か…」

「ですがいくら血の繋がつた姉兄弟だからとしてもやつて良い事とい事がありますわ！」

俺の過去話を聞き終えた武流達は口々にそう言つてくれた。

「…という事はもしや魔石の反応があつた地点というのはＩＳ学園ですか？」

「そうである！先日の件の事もあるから此処に一つＩＳコアを拝借させて貰つてきたのだが…」

オツペンハイマー卿が懷から出したのはＩＳのコアだつた。

「もしかしたら俺達の中で誰かが動かせる可能性があるかも知れないという事ですね？」

「その通りだ、各自このコアに触れてみたまえ」

「分かりました」

俺達はそのコアに触れていつた。

すると…

「おお……」

「ま、マジかよ!…」

「…」

コアは武流や八尋さん、ラウルさんには一切の反応を見せず、俺にだけその眩いまでの反応を示したのだ。

「ふむ…これには何か作為的な物を感じるな…だが此処は早急に一夏君の専用機を拵えさせよう」

俺の過去話から何かを感じ取つたのかオッペンハイマー卿の言葉に何かひつかる物を感じたが今は緊急を要する事態である事には変わりはない。

もし魔石が女尊男卑思想に染まつた連中やアゲイルの様な者達に渡つてしまえば世界はそれこそ一貫の終焉を迎へ、誰しもが持つさやかな願いでさえ壊されてしまいかねない。

そうなる前に早く我がカルテルの手で回収せねばならないのだ。「御意…御身のままにこの任務必ずやりとげてみせましょう！」

卿に一礼し下がつた後。

「まるで一夏は「願いの守護者」だな」

「俺が？」

武流にそう言われ俺は首を傾げる。

「お前はこの女尊男卑の世でもささやかな願いを守りたい…そう思つたんだろう？」

「…ああその通りだ…」

武流に見抜かれるとはな。

「まあ、他の団員からは孔雀とこはく、それともう一人いかせるつもりだ」

「こはくさんは分かりますが孔雀つて？」

「ああ、そういうえば一夏は未だに面識がないんだつたな…アイトは基本一匹狼で気難しい所もある奴だがまあ腕は確かだし大丈夫だろ…多分…」

「た、多分つて…」

「ああ、孔雀…琴代は昔つつかつてきた不良の一団をフルボツコにした事があるからなー」

「それはそれでどうなんですかね…」

一匹狼の理由つてそれかよ！

不安になつてきただぜ‥。

ビー！ビー！

！これは…野良ジユエルガイスト出現警報だ。

「行こう一夏！」

「ああ！」

俺達は急いでまた卿の間に足を運ぶのだつた。

「卿、状況は？」

「…IS学園付近の市街内で三体のジユエルガイストの出現が確認された。

⋮

「他に何か問題が？」

「そこからは私が代わつて説明しよう」

卿の横で待機していたのは卿の右腕である人物であり精銳部隊「ダイヤモンドナイツ」隊長であるアダム・フルブスだ。

「実は先程確認された事なのが出現したジユエルガイストの侵行方向がある地点を目指している事が判明してきたのだ」

「ある地点…もしかしなくてもIS学園！」

アダムさんが告げてきた一言に俺はすぐに思い当たり言う。

「まさか魔石の存在をもう嗅ぎつけたのか⁈」

「いや…恐らくそれだけじゃない…きっと今確認されているジユエルガイストは野良ではないと思う」

「一夏？他に何か思い当たる事があるのか？」

「ああ、まずは地点についてだ。

武流のいう通り魔石も関係しているとは思う。

だけど魔石つて使用されなければ例えガイストでも感知は出来にくい筈だろ？」

「ああ、探知系に長けてるガイストならまだしもそちらの下級ガイストでは俺達と同じく余程付近でなければ魔石は感知しにくい…まさか⁈」

武流は俺が投げかけた問いかけにすぐに気が付いたようだ。

「ああ、きっと魔石を偶然拾つた一般人それも恐らくは女尊男卑思想による被害者の願い事に反応してIS学園へと向かつてゐるに違いない。

そう、願いを成就する為、ISを破壊し尽くす為に…」

「いかん！もし一夏君の予想が正しいのならば只のIS如きではたとえ下級といえどジユエルガイストを倒す事は出来ん！」

本来ならば生まれるべきではない願いによつて世界に綻びが生じそこからまた封印されていないジユエルガイストが世に溢れ出る。この負の連鎖を助長してしまつてゐるのがISという女尊男卑を広めてしまつた存在だ。

そのせいでささやかな願いまで壊されるのはもうたくさんだ！

「出撃許可を！」

「うむ！直ちにコードネーム『金剛』、『天』、『鬼神』…そういうば一夏君の勲名を与えておらんかつたな…では今から『守願者』じゃ。

お前達は出現したジユエルガイストの駆逐・封印に充れ！アダムは件の魔石を拾つた者を探し出すのだ！」

「は！御身のままに」

ちなみに金剛が武流、天がすせりさん、鬼神が八尋さんの事だ。それにしても守願者か…その勲名に恥じない働きを見せるぞ！

EPⅢ 「願いの守護者と予想外 後編」

「一夏達が駆け付ける十分前」

Side?

「糞…なんで俺がクビにならなきやならないんだよー!…」

「なんで…なんで彼が捕まらなきやならなかつたのよ…」

「儂なんか息子と一緒に男手一つで育ててきた大切な孫を殺された!

あの女に!…」

「父さん本当にすまない…僕があんな女だと気が付いていれば今頃たかしは…」

夜、公園のベンチに集まっていたのは皆、女尊男卑主義者による被害者達であった。

ある者は勤め先の新入女性社員によつて仕組まれたあらぬ冤罪をかけられクビにされてしまつた者、またある者は心の底から愛した男性が身に覚えのない横領をした罪で牢獄に入れられてしまつた女性、そして保険金やその他のお金目当てで巧みに近付かれ大切な息子、孫を殺されたと泣き叫び後悔の念に苛まれる父親と祖父であった。

「ククク…」

「だ、誰だ!?

そんな途方に暮れていた彼等の前に突然茶色のローブを被つた謎の男が現れ警戒する。

「そんなに警戒なさらなくても大丈夫です。」

此処に集まられている貴方方にはどうしても叶えたい願いがある
…そこで御座いましょう?」

「…」

ローブの男に言われ彼等は顔を見合わせる。

「その願い私が叶えて差し上げましようか?」

「本当か!?

「ええ、対価は頂きませんよ。

如何いたします?」

「…」

男の言葉に彼等は悩む。

「方法を教えてくれ！」

「親父！何かコイツ怪しいよ！不味いって！」

「うるさい！儂は孫の敵をとるんじや！」

「私だつて！」

まだ冷静でいられた息子の彼だけは未だローブの男を怪しんで引き止めようとしていたが他の追い詰められた者達に一蹴りされてしまう。

「では、この宝石をお受けとり下さい」

「？」

「その宝石を持つて願い事をいえば即座に叶えられますよ」

「…」

にわかには信じられない事だつたが彼等は宝石を受け取りそれぞれ願う。

普通ならばここで自分自身が抱える願いを叶えようとする筈だが彼等の願いはある一点に集中した。

「I Sへの復讐を！…」

その願い事が混乱を呼び寄せるとは知らずに…

「フフ…これで良い…」

彼等がそう願つたのを確認したローブの男は不敵な笑みを浮かばせながらその場を立ち去つていった。

バタ…

「み、皆？親父？…親父イー！」

宝石で願いを叶えようとした三人は突然倒れて意識不明になつてしまつたのだ。

唯一願いを叶えようとしなかつた彼だけはこの事態に混乱しふと空を見上げるとそこには…

「うわああああー！」

この世の者とも思えぬ化物が三四飛び去つていくのを目撃した。Side?

「一体何なのよこの化物は?!」

「くつ!…」

突如街に現れたこの世のものとも思えぬ化物が現れ早急に I S 部隊の緊急出撃が下されたがどうしてか I S の攻撃のほとんどが通じず劣勢を強いられていた。

「どうします?」

「一時撤退して防衛線を固めるしかないわ…」

私、更識 刀奈は苦虫を噛む。

専用機「蒼き淑女（ミスティリアス・レイディ）」の単一仕様能力である【清き熱情ークリア・パツション】すら奴等には通じずどんどんと此方へ距離を詰めてきていた。

「グウウ!…」

「この!」

「駄目！下がつて！」

私は一時撤退を促そうとしたが部隊の一人が飛び出していつてしまう。

「何を言つてるの？ I S は最強なのよ！あんな化物たつた一匹如き…」

「グアアー！」

「え?…」

無謀にも化物に向かつていった隊員は化物のその強烈なまでの体当たりのパワーに体を引き裂かれたのも分からずに絶命してしまつた。

その死体を化物は貪り喰らつっていたのだ。

「ぜ、絶対防御が!…」

「そんな!…」

「嫌あああー！死にたくないー！」

「ちよつと皆!…」

I S の搭乗者を守る機能である筈の絶対防御システムをも物としないパワーを持つ化物の前では無力な事に嫌でも気が付かされた隊員達はひたすら逃げの一手に集中し周辺付近はパニックと化して

しまつっていた。

「グルル！…」

「あ…」

死体を貪り終えた化物は取り残されていた私に標的の目を向けてきていた。

不味い！…そう思うが体が恐怖で思うようには動けずにいた。

「グルルアー！」

「ツ！…」

思わず目を閉じる。

「？…」

「グ！？…」

だが襲い来る痛みは一向に訪れなかつた。

それ所か先程まで平然としていた化物が悲鳴を上げてゐる事に気が付いた。

「一体何が？…」

月夜に照らされる中で鮮やかな紅い鳥と蒼い綺麗な髪を持つ小柄な女性、そして鮮やかな紫の翼を持つ機械の龍と紫のゴーグルと白いコートを纏つた男性がいた。

S i d e 一夏

「くつー…既に犠牲者が出てしまつてゐるようですねわ…」

「畜生！間に合わなかつたか…」

俺とすせりさんが一番近くまで迫つていた下級ジュエルガイスト「駄獣・モデケ」を追つていたが既に犠牲者が出ていた事に苦虫を噛んでいた。

「！あそこには人がいる！」

「なんですか？」

「ダール！」

「ガウウー！」

俺はすぐにまたモデケが人を襲いそうになつてゐる事に気が付きダールに指示を出しモデケに攻撃を加え怯ませた。

「そこの人！ISのエネルギーが残つてゐるなら今之内に全力で撤退

して下さい！」

「ごめんなさいね…腰が抜けて力が入らないのよ…」

「それなら…ごめんなさい！」

「え？……ぐー…」

俺はその人が今すぐには動けない事を知るとすぐさま術をかけて眠らせた。

「すせりさんはその人を頼みます。

モデケは俺とダールがなんとかします

「ええ！無理は禁物ですわよ！」

「ああ！ダールいくぞ！」

すせりさんの激励を受けて俺はモデケに立ち向かう。

「ダール！『シングルギア・シユート』！」

「ガアー！」

「グガアアー！？」

ダールの体を構成する歯車の一部が一時的に外れ熱を帯びモデケに真っ直ぐ向かっていき奴の体を斬り裂いた後、ブーメランのように戻つて体に格納される。

「コイツでトドメだ！『ギア・ウイングブラスター』！」

「ガアー！」

「グルオオー！？…」

「一夏、すせり！大丈夫だつたか？」

「ああ！」

「この通り無事でしてよ」

ダールの翼から放たれる歯車の嵐がモデケを蹂躪し弱らせた所で

残りの二体を片付けた武流達が駆け付けてきた。

「それより魔石を拾つた人の特定は？」

「アダムさんが既に目星を…というかそれに巻き込まれたであろう一般人から通報があつたらしく先に俺達が駆け付けて魔石を回収した。

その一般人から話を聞いてみたがやはり一夏の睨んだ通り女尊男卑主義者による被害者達だつた。

しかし、魔石は拾つたのではなくロープの謎の男から渡されたそう

だ。

発動者は運気を少し消費したぐらいで生死には問題ないそうだ

「そうか…此方では既に犠牲者が出てしましました…」

「大方、I Sの力を盲信した者だろ？結局は彼女達の自業自得でしか
ない」

「それはそうですけど…」

既にモデケに無謀にも向かい犠牲者が出た事を告げると八尋さんは冷たくそう言つた。

俺には反論の余地もなかつた。

「となるとこれからも警戒しなくてはならない案件が増えたな…」

「といいますと？」

「かつて俺が率いていた残党ではなく新たに組織から裏切り者が出了
可能性があるという事だ」

「何ですつて!??」

八尋さんが告げた事実に俺達は驚く。

「…もしやフルブライト左官ですか？」

俺はすぐに思い当たる人物、オツペンハイマー卿と未だ対立してい
る男の名を言う。

俺も彼の事は未だに好きにはなれそうにない。

「嫌、彼は彼で我がカルテルを思つてゐる筈だからこんなおおっぴら
な事はしない筈だ。

魔石の件も含め恐らくは彼の部下や一部の者達による暴走かもし
れないが…詳しい事は現在調査中だ」

「…」

多くの謎を残したまま事件は終息を迎えたのだつた。

E P IV 「願いの守護者と入学、クラス代表決定戦 前編」

S i d e 一 夏

「お呼びでございましょうか？卿」

多くの謎を生み残したまま I S 学園襲撃未遂事件が幕を閉じた翌日、俺はオッペンハイマー卿に呼び出されていた。

恐らくはアレの件であろう。

「うむ、一夏君貴殿の専用機が完成を迎えたのでな。
早速だがテスト運用をしてみたまえ」

「はー！これはありがたき幸せ！」

では早速やらせて頂きたいと思います！

試運転に付き合ってくれるな武流？」

「ああ、勿論だ！」

シユミレーターは奥の部屋に配置してあるぜ」

「おお！ありがとな！」

武流の了解を得て早速テスト運用を行う事にした。

「凄え！…この機体確かにダールの力を完璧に再現出来ているじゃないか！」

「ガウ！」

一次移行を終え確認してみる。

その機体能力がダールの持つ力を完璧に再現出来ていた事に俺は驚いた。

「これからよろしくな「紫玉宝龍」」

「そして I S 学園入学の日、

「来たか。私が孔雀、琴代 キラだ。

私は一夏君、君の協力者として二年に編入する事になつていてから
よろしく頼む。

つて零戦、頭の上にはいつも乗るなと言つてゐるだろう！つては!?

⋮

「ニヤー♪」

「あはは…これからよろしくお願ひしますね琴代さん」

「ああ…」

学園前につくと三人の少女がいた。

件の組織の協力者の内の一人が彼女か。

武流に聞いていた人物像とはちよつとギャップがあるな。
しかし猫に零戦なんて名前を付けるなんてぷづ！…

「わ、笑うな！／＼＼＼＼＼」

「はいはい」

琴代さんが顔を超真っ赤にしていたので弄るのをやめる。

「お久し振りですね一夏さん！」

「I Sを動かしたのって一夏だつたんだね」

「本当に久し振りだなこはくさん、それに狐夜音…もう一人の助つ
人つてお前だつたんだな」

「うんそうだよ！」

一人は武原こはくさん、八尋さんの事件で巻き込まれた元一般人の
ジエムマスターだ、

元々不治の病を患つていて余命幾許もなかつたのだが武流が願つ
た事により現在では病氣もすっかり完治し現在は兄の晃一さんと共に
我がカルテルに身を置いている。

晃一さんは魔石を所持していないが彼女の保護者として身を置か
せて貰つている。

そしてもう一人が二年前の俺と同じくアゲイルの人工緋赤眼実験
の被害者であり俺の恋人もある弓花 狐夜音だつた。

彼女達は八尋さん主導の部隊員で動いていた為こうして会うのは
本当に久し振りなのである。

「じゃあ、いきますかね」

「はい！」

織斑一夏としてではなく生まれ変わった鍼岸一夏として俺はこの
任を成し遂げてみせる！

S i d e?

「へへへ…ようやくこの時が来たぜ俺はこのビッグウェーブに乗るぜえ！」

彼は織斑 依秋。

テンプレの如く…とは言い難い死に様（浮気しまくつて二人の女性に刺された）で神に転生して貰った元一般人である。

特典は一夏のポジションを奪い約束された生を送る事だった。

その為に彼はあらぬ噂を流し一夏を苛め抜いてきたのだ。

だがそれがもうすぐ…というよりも既に脆く崩れ去っている事を彼は知る由もない。

「？山田先生何故此処に空席があるんですか？」

「ああ、すっかり言い忘れていましたが急遽編入生が入る事になりましたよ」

「？…」

自身の持ち得る原作知識の中では全く見覚えの無い空席が三つもある事に疑問を感じたが山田先生から訳を聞き依秋は気にする事もなかった。

「すいません遅刻しました！」

「あ、まだ大丈夫ですよ！」

「なつ?…」

慌てて入つて来た編入生の内の一人を見て依秋は驚愕した。少しばかり変わつてはいたが紛れも無い一夏だつたからだ。

S i d e 一夏

「…」

チツ！…よもやあの糞兄貴と一緒にクラスに編入されるとは予想外だつた。

だがもう俺はあの時の出来損無いだつた自分とは違う。

もう絶対にアイツなんかに奪われてなるものか。

「ガウ?…」

「大丈夫だダール…」

ダールが俺の様子を心配したのか周りをウロウロしていた。

ちなみにダールの姿は俺が認識阻害の術をかけているのでジエム

マスター、もしくは魔石を持つ者でなければ見る事が出来ない。

「も、もう一人の男子イー！」

クラスメイト中から黄色い悲鳴が上がる。

五月蠅つせえ！

「どうか皆さん落ち着いて下さい。

俺は皺岸 一夏です。

先日の調査で I S を動かせる事が判明致しましたので急遽入学が決まりました。

どうぞよろしくお願ひします

「キヤアアアー！」

「ぐふぐふ……」れで夏コミの題材は決まつたも同然ね！」

落ち着かせる所か火に油だつたな…。

そしてそこ！何を考えてる!?

悪寒がしだぞ…

「私は弓花 孤夜音です。

あ、後一夏は私の大事な彼氏さんだからそういう事で！」

「!?」

孤夜音が俺の彼女宣言をすると声にならない悲鳴が聞こえてきた。
「なっ!?（出来損無いの分際で戻つてきやがつたのはあきたらずあん
な可愛い彼女持ちだと!?絞りカス如きが！…）

只一人依秋だけはドス黒いオーラを出しながら一夏を睨みつけて
いた。

「はあ…よくもこれだけの馬鹿者達が毎年集まるものだな…」

「！」

織斑 千冬か：元姉も此処で教師をしていたんだな…でも今はそ
んな事に興味は無い。

それから色々あつてクラス代表を決める事となつていた。

「はい！織斑君が良いと思います！」

「なら私は皺岸君を！」

「え、俺!？」

「…」

糞兄貴はクラスメイト達の他薦に戸惑っていたが俺は任務の事がある為この件に一切興味はなかった。

だが…

「お待ち下さい！いくら男性操縦者が珍しいからという理由だけで決めるなど邪道ですわ！」

こんな極東の島国でそんな屈辱を味わえとでもいうのですの?!」
イギリス代表候補生のセシリア・オルコット女史がそんな事を言い放つてきた。

「ほん！イギリスだつて大したお国自慢ないだろう？」
「なんですつて!？」

「あわわ！…」

はああ馬鹿兄貴：売り言葉に買い言葉で二人の喧嘩は勃発した。
ていうか山田先生はあたふたしていて賢姉殿はとすると只、傍観しているだけだつた。

おい仮にも教師ならば彼等を止めろよ。
「オルコット、織斑そこまでにしておけ！」

自分達の発言が何を意味しているのか分かっている筈だろう？」「何!?…だがコイツが…」

「くつ!…」

仕方無く俺が仲裁に入るが糞兄貴はやはり以前と全く変わらず己の意見を押し通そうとしているのが分かる。

一方のオルコットは俺の指摘に何処か思う所があつたのか押し黙つていた。

「…決闘ですわ！」

「ああ、いいぜ…四の五いうより分かり易い！」
「はあ…」

結局こうなるのかよ…

「先生、私も立候補します。

一夏君を馬鹿にしたのは許せないから」

「!?」

「ヒツ!…」

「狐夜音お前…」

久し振りに笑顔なのが何処か黒いオーラを感じさせた狐夜音を見て糞兄貴とオルコットは怯えていた。

「ああ、まあ良いだろう。

日程は三日後とする、

織斑、オルコット、鍛岸、弓花は準備をしておけ

かくしてかなり理不尽だが新たな戦いの始まりの火蓋がきられたのだった。

E P V 「願いの守護者と入学、クラス代表決定戦 中編」

S i d e 篇

「一夏？お前なのか？…」

私、篠ノ之箒は今、鍛岸と名乗り急遽クラスに編入してきたもう一人の男性 I S 操縦者を見て驚きを隠せなかつた。

苗字は違うが名は同じであるし容姿もどこか私の知る一夏に良く似ていたからだ。

私の知る一夏は世界初といわれた一番目の男性操縦者であり、実の兄である依秋に出来損無い扱いで陰湿で酷い苛めを受けていた。

私はなんとかして何度も依秋の取り巻きを含む彼等が行つていた苛めを止めようと試みた事はあつた。

彼等の姉である千冬さんは話を聞いてくれる暇などなく仕方無く居所を転々としていた東姉さんにメールや電話で何度も何度も相談したのだが…。

『よつくんが苛め？

そんな筈ないよ！何かの間違いか冗談でしょ？…』

「?」

東姉さんは私の話なんか全く信じる所か真面目に聞いてさえもくれなかつたのだ。

東姉さんはアーツにすっかり騙され御執心だつた事を確信してしまつた私はそれから一切の連絡を絶つていた。

だが二年前にドイツで一夏が誘拐されてしまう事件が起きた。

勿論この時だけ姉さんに探して貰える様に頼んだのだが最早彼女は依秋以外の事に興味を失くしてしまつていてせいで全然とり合つて貰えなかつた。

現状まで欠陥品でしかない I S を造つて可笑しな風潮を拡散させる様な真似をしておいて責任など一切とつていらない彼女は一体何がしたいのかは今はもう分かりたくない。

結局一夏は誘拐犯に殺されてあのまま亡くなってしまったのかそれともまだ何処かで生きていてくれているのかは分からず仕舞いで千冬さんも私も傷心していた。

只一点、あの屑達だけは狂喜していいたようだが…私は心の底からとてつもない怒りと悲しみを感じて以降自身から一切依頼に近付く事はなくなつた。

あの時の己にもつと力があれば悔いるばかりの時間が過ぎていつた。

だがある日なんだかとても不思議な感じがする宝石を拾つて少しだけだが驚くべき事が起こつたのだ。

数日後、なんとあの屑の主導で一夏を苛めていた奴等の内の数名が投獄されたのだ。

勿論一夏に対する苛めの件ではなく別件の犯罪だつた様だが…私は少しだけスッキリしていた。

このままあの屑達も地獄にとでも思つていたがよもやI-Sを動かしてしまはず予想外だつた上に東姉さんが簡単に役人達に捕まる様な天災ではない事は分かつてていたので願いは願う前に潰されていた様なものだ。

しかし…見れば見る程そつくりだ…。

「つてん?…」

私は観察していてふと気が付いた。

鍍岸の右肩になんか小さい機械染みたドラゴンみたいな生物らしきもの?が見えたからだ。

なんなのだアレは?…クラスメイト達は愚か千冬さん達教師もその物体に特に気が付いている様子は見られない。

もしや私にだけしか見ていないとでいうのだろうか?…

ジーツとソレを見つめていると少しだけソレも此方を見てきた様な気がしたのだが…。

「一体?…」

私は気になつて仕方無かつたので彼に話しかけようとしたのだがイギリスの代表候補生が話かけていた上その話が丁度終わつた所で

次の授業が始まってしまったので出来ず仕舞いであった。

放課後

Side 刀奈

「くうつ…」

先日の正体不明の化物の襲撃においてあの一方的な蹂躪のせいで傷が癒えない者が少なからずおり誰も口にする事がなかつた。

私自身はまだ良いがミステリアス・レイディはある化物の尋常ではない攻撃によつて大破させられてしまい修理が難航していた。

世界初、第2の I.S 男性操縦者の出現で世界は更なる混沌が渦巻いているというのにこれでは…。

「織斑依秋君は何の変哲も無い初代ブリュンヒルデ、織斑先生の弟、だけどもう一人は…」

突如として湧つき出てきたもう一人の男性操縦者である鍛岸 夏君についてはほとんど分からなかつたのだ。

私は彼に不信感を感じずにはいられなかつたが…。

「お前が更識の次期当主だな?」

「え、ええそうよ…そういう貴方は編入生の琴代キラさんよね?… 貴方…いえ鍛岸君を含めた貴方達は一体何者?…

完全にノーマークであつた私と同じクラスへの編入生の一人である琴代さんに私は長ドスを突き付けられていた。

「その質問への回答は警告を以て答えよう。

だがな、たかが一部に過ぎない暗部の小娘如きに「我がカルテル」の情報を知る必要は無い…おとなしく手を引けば貴様の身の安全は保障すると約束しよう

「…わ、分かつたわ…」

「フン…」

私は彼女を含む編入生が鍛岸君と何らかの関係があると踏み質問したが案の定多くは答えてもらえなかつた。

私は琴代さんに解放された後急いで実家に連絡を入れてこの件を伝えた。

すると帰ってきた反応は

「『何!?』刀奈良く聞いてくれ…その組織には一切手を出すな!
いくら更識家でもあれを敵に回すのは非常に不味いのだ!…」
「どういう事です!…」

「『とにかくだ!』」

「ああ!…」

父にそれだけ言われ通信を切られた。

「我がカルテル…」

私は計り知れない恐怖を抱いていた。

S i d e 簪

「織斑依秋…」

突如出現した男性操縦者の専用機制作の為に私の専用機開発が凍結されてしまい自分で制作する事になり私は憤慨していた。

何故たかが一人の為に私のだけが凍結されなきやいけなかつたのかと。

「うーん…気分転換がてらに予備パーツ買いにいくかな…」

機体制作が上手くいかずにいた私はそう言い聞かせ外出する。

「キヤ!…」

「あ、ごめんなさい!…」

その帰路の最中、寮の門限が迫っている事に気が付き慌てていた私は誰かとぶつかってしまう。

「良いよこつちも慌ててたから…」

「そ、そうですか…」

向こうの女性もすぐに謝罪してきたのでそのまま別れた。

「ん?…コレは…」

女性が立ち去った後ふと見ると赤い角錐の宝石が落ちていた。
これってあの人の落し物?…

「うつ!…今のは?…」

宝石に触れた瞬間、私は一瞬だけ眩暈を感じた様な気がした。

ほんの一瞬だつた為あまり気にかける事はなく私はそのまま帰つた。

S i d e?

「…彼女なら大丈夫だよね？…」

彼女の名は草壁 真珠。

以前の事件に巻き込まれ自身の弱さに付けこまれ力を暴走させていた事もあったが見事それを乗り越え己自身の強さを得て成長した。

彼女はもう自分には必要無いと魔石「無銘の華」をワザと落とし以前の自身「空っぽ」を簪に感じ重ね託したのだ。

「後のは頼むね：アルラウネクイーン」

「任せておけ」とかつての己の影とも相棒ともいうべき存在の声が彼女には聞こえていた。

EP VI 「願いの守護者と入学、クラス代表決定戦 中 編 PART II」

Side一夏

クラス代表決定戦当日がやつてきた。

俺は忌まわしき過去の一部を精算する為、孤夜音も個人的な怒りを晴らす為に気合十分だつた。

対するオルコット女氏は流石は代表候補生の名は伊達ではないといつた所か真剣な表情をしていた。

そして：俺が気にする事というよりしたくないのだが糞兄貴はどうと動向をダールに一応の監視をさせた所奴は当日までほぼ何の練習もせず寮でダラダラ過ごしていただようだが：物凄く馬鹿なんじやないか？

そして奴の専用機だという「白式」…どうやらアレには元賢姉殿が使つていた刀だけが搭載されているようだが：賢姉殿がなんか奴の機体と同じような欠陥品を渡してこようとしてきたので専用機の件を話すと彼女は驚愕と苦い顔をしていただが…。

糞兄貴の機体は表向きは「倉持技研」という機関が製造したらしいが恐らく天災、篠ノ之束の手が加えられている事だろう。

昔から周囲に迷惑をかけていた奴であり更には世界を滅茶苦茶にしておきながら己を顧みないまま、また肩に肩入れするのか彼女は：まあ本当に俺が気にする事じやないなうん。

「鍬岸、織斑の機体初期設定に時間がかかっている。
先にお前が出ろ」

「…」

チツ！…まあまずは前菜といふか。

まあ、それ以前に賢姉殿の上から目線な命令口調になぞ返答しなくなかったので俺は無言でアリーナに向かつたのだが。

「いくぞ！」

俺は紫玉宝龍を展開し待ち構えていたオルコット女史の下に舞い

降りた。

「セシリ亞戦前半推奨戦闘BGM 「運命」」

「逃げずに来ましたのね…ってなんなのですかその機体は!?」

「ちよいと俺の…いや、俺達の機体は特別性でね」

オルコット女史は紫玉宝龍の見た目に驚きを隠せないようだ。

まあ、紫玉宝龍はジユエルガイストの中でも類をみない半機械＆ドラゴン系のダールの力を再現した機体なので少々とというかかなりメカメカしい見た目で他のどのISよりもISらしく見えるといった所だろうか。

「ソソー！ま、まあ良いですわ…それではサヨナラですわね！」

「！」

気を取り直したオルコット女史がレーザーライフルを向けてきたので俺は慌てず回避する。

「なんですって!?」

「これみよがしな体勢でいたら余程の馬鹿でも銃口に気が付くわ！」
「クツ!?なら…私、セシリ亞・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で踊りなさいな！」

「ほう、ならば俺はそれに応えて歯車（ギア）で運命の戦慄（旋律）を紡ごうとしようか！」♪♪

「?!何やら語弊が…」「ターゲットロック！…いけ！」キヤア?!」

俺の言葉に悪寒がしたのか一瞬動きを止めてしまうオルコット女氏。

だがそんな恰好の隙を見逃してやれる程の御人好しではない。

俺はすかさず武装の一つである「シングルダーケギア」を射出する。隙だらけだつた彼女に物の見事に命中し体勢を崩した。

「くうつ!?で、ですがそんなモノが何だというのですか?!

お行きなさいブル・ティアーズ！」

「ムツ！」

彼女の機体から機体名と同じ名前のBT兵器が射出される。

だがそれはどれも同じ様な単調な動きで回避は容易かつた。

「何故当たらぬのですの!?

「…足下を御留守にしてて良いのかな?」

「なつ、これはBT兵器ですか!?…キヤア!?」

先程射出したギアがブームランの様に旋回しオルコット女氏のSEをまた削り取る。

「似て非なる物だ」

無論全てを教えてやる義理は無いのでそれだけ告げる。

この分だと単一仕様能力も使用する必要性はなさそうだ。

「このまま一気に決めさせて貰うぞ!喰らいな!」

「い、インター…セプ…キヤアア!?…」

俺はラストスパートに「シングルダーカギア・ブレイド」をコールする。

オルコット女史も慌てて対応しようとするがもう時既に遅し!勢い良く斬りつけた。

『WINER! 鍔岸一夏!』

するとオルコット女氏のSEが底を尽き勝敗は決した。

「ふうーー!…まずはまずまずの結果という所かな」

ふむ次のカードは…狐夜音と糞兄貴のバトルか。

EP VII 「願いの守護者と入学、クラス代表決定戦 中
編 PART III」

S i d e 狐夜音

さてとやつてきましたよ。

一夏さんを今迄やりたい放題にないがしろにしてきた屑をこの手でシメル事が出来る日が。

「狐夜音、くれぐれも人工緋赤眼の力だけは使うなよ？」

「分かつてるてば！」

「それなら良いんだ…」

「それじゃあ、来て！ 神腕雷侍！」

私は自身の所持する「ブルー・ルビー」、「イエロー・ルビー」で召喚し使役するかなり珍しい類の妖刀・ガントレット型という二対揃つて初めて能力がフルに発揮される武器型ジュエルガイストである「ブルーレイジング・スライサー」、「トール・ガントレッター」の力を再現した機体である神腕雷侍を呼び出し装着し空高く舞い上がりバトルの場へと舞い降りた。

「来たねふふ…」

「…（・ | ・；」

降り立つと織斑依秋が自身の専用機である白式を纏い仁王立ちで待ち構えていた。

なんだろう…絶対碌な事考えていないであろうその気持ち悪い顔でそれは非常に似合わない。

私は思わず退いた。

ある意味あのアゲイル以上に不気味でしかない。

「ふふ…この僕の力に恐れをなしたのかい？」

「どの口が言っているんですかね？…その力はそのI-Sがある事で保たれる力でしょう？ 貴方自身の力なんかじゃないわ！」

「フン！ おとなしくしていれば痛い目に遭わずに済んだのにね…そつちがその気なら僕も容赦は出来ないよ？」

「や、加減なんかして貰わなくて結構ですから」

「馬鹿にしやがって！」

私が力の根本を告げると彼には全く意味が通じていないようで逆切レの様な言葉をぶつけてきたので此方も挑発し返すと更に逆上したようだ。

馬鹿で最低な屑ですね…こんな奴が愛しの一夏を傷付けていたのかと思うと更に怒りが高まりそうになるがこれ以上はいけないといなんとか抑える。

♪推奨戦闘BGM 「Shockin g Blue」♪

「ははは！コレがISの…俺の力かー！」

屑はそんな事を言いながら刀を振るつてくる。

だが愚直に真っ直ぐ振るうだけのそんな刀撃とも呼べない攻撃に当たる程私は未熟ではない。

「遅いよ！」

「何イツ!?…」

己の攻撃が受け止められるとは思わなかつたのか彼は驚愕の表情をしていた。

「すうーー…奥義、【魔弾】！」

左片手で妖刀を振るつて屑の刀を受け止めて弾き返し、空いている右手にはガントレットをコールし小さく呼吸し力を蓄えた後、技を屑の懷へと撃ち込む。

「がつ!…」

蓄えた力を一気に平手打ちで叩き込む魔弾を受けた屑は大きく仰け反つた。

私は一旦距離を取つてすぐに刀を構える。

「可愛そうなので教えて差し上げますよ？これが刀撃というものです！せや！」

「なつ!…ガツ!…ゴツ!…」

私は多方向からの斬撃を仕掛ける。

「ISは本来力を象徴する為の物ではないの！

その程度の事すらも理解しようとしない貴方なんかにはやつぱり

扱う資格なんてものは無いわ！」

『WINNER！弓花 狐夜音！』

屑はまるで対応出来ないのかモロに喰らい続け遂には単一仕様能力を使う事も無くSEをエンプティーにした。

「奴はどうだつたお前から見て？」

「正直やつぱ期待外れでしかないわね…もう少しごらい耐久あると思つていたんだけどな…」

「はは…」

正直あまりの力の差に落胆して思わず本来の力を使いそうになつたけどなんとか抑えた。

元よりあんな屑如きに緋赤眼の力を使つたら末代までの恥になつてしまふわね…。

さて次戦のマッチングはオルコットさんVS屑か…その戦いでオルコットさんはまだ一夏とのバトルで立ち直れていなかつたのか屑に軍配を上げてしまい白式の【零落百夜】によつて敗北してしまつた。これは一夏にも予想外だつたようだ。

S i d eセシリ亞

「…一体私に何が劣つているというのですの!?…」

私は見下していた男性操縦者相手に二連敗してしまい落ち込んでいた。

織斑依秋は私の古傷を抉つた上での単一仕様能力を叩き込んできただけだが…これは己のせいでもあるのである意味仕方が無いといえるのかもしれない。

だが一方の鍍岸 一夏には圧倒的な力の差を見せられた上での完膚無き敗北…こんな無様を晒してしまつた私はこれからイギリス代表候補としてやつていけるのか分からなくなつてしまつていた。

いつその事この敗北を帳消しに出来てしまえたら良いのに…。

「その願い叶えてしんぜよう

「キヤ!?」

そんな事を思つてはいるといつの間にか目の前に見るからに怪しいローブを着た男性がいた。

「むむ？…ほほう、お主は既に石を持っている様であるな…ならば願うが良い」

「石？あの何の事やらさつぱり…つていなし！…」

可笑しな事を告げいつの間にか消えていたローブの男性の言葉が

私は気にかかる仕方無かつた。

「…もしかしてお母様の形見のあの宝石に何か…」

でもなんであの男性は私がソレを持っている事を知っていたのだ

ろうか。

「…」

私は急いで寮に戻り、件の宝石を持って再び外に飛び出し握り締めながら願つてしまつた。

それが後に起こる大参事の幕開けになるとは露とも知らずに…。

EPⅧ 「願いの守護者と入学、クラス代表決定戦 後編」

S i d e 一 夏

「！」

まさか、この感覚は！…

「一 夏！…」

「ああ…」

俺達の中の人工緋赤眼の超人的感覚が付近で魔石が発現し封印されたジユエルガイストが解き放たれてしまつた事を告げてくる。

「狐夜音、結界の方頼むぞ」

「ええ！ブレイジング・スライサー！」

狐夜音が妖刀を召喚して地面に突き刺すと術式が展開され周囲に結界が張られた。

これで魔石を持たない一般人は容易に近付けなくなつた…と思っていた矢先に予想外の事が起きていた。

その頃、S i d e 依秋

「な、なんなんだよこの化物は！?…」

神（紙）屑転生者、依秋は自身の目の前で突然に起こつた事態に酷く混乱していた。

一体何処から侵入してきたのかが分からぬ目の前の異形に対しあ心戦していた。

いやそもそもI Sという物語にこんな異形は存在しない筈だ。なのに目の前の異形は一体何だというのか？

依秋は「一夏のポジを奪う」という特典しか受け取つておらず目の前の異形、ジユエルガイストに対応可能な策など勿論持ち合わせていない。

だが、彼は無謀にも己とI Sの力を過信しジユエルガイストに突撃していった。

「【零落百夜】！—」

たまたまなのか分からぬが苦し紛れに使つた技がジユエルガイストに直撃する。

だがこれではまだまだ甘かつたのだ。

「グアー！」

「なっ!? 零落百夜の直撃を受けて平然としているだつて!?」

依秋はまさかの事態に驚愕を隠せない。

彼はすっかり忘れていたようだが零落百夜の特性は対エネルギーに特化している能力だ。

エネルギー能力を所持していないのは勿論の事、尚且つある物を用いた攻撃でないとジユエルガイストには怯ませられる所か掠り傷一つすら与える事が出来ないのだ。

だが彼はそんな事を知る由も無い。

「グアー！」

「んなあつ!?:」

ジユエルガイストが咆哮を上げたかと思うと、更に驚くべき物が出現してきた。

それは紛れも無くセシリリアの駆るブルーティアーズのBT武装だつたのだから。

そう、セシリリアが「敗北を帳消しに」と魔石に願つた直後、封印されていたジユエルガイストが歪んだ願いによつて暴走しセシリリア自身を取り込んでしまつたのだった。

勿論依秋にはそんな事が分かる訳がなく続けて突つ込もうとした所逆に反撃を喰らい無様に気絶させられてしまつた。

後半セシリリア憑ジユエルガイスト戦推奨BGM「Silly—Go Round」

S i d e 一夏

「チツー……既にあの馬鹿が交戦していやがつたか！」

結界を張る前に交戦していたようで無様に気絶させられている糞兄貴の姿を見て俺は内心舌打ちしていた。

「こはくさん、琴代さんは結界の影響を受けた一般生徒達の避難をよろしくお願ひします！」

「うん！」

「了解した」

「くはくさんと琴代さんに避難誘導は任せ敵を見据える。

「魔石の発現者は恐らく…」

「ああ、ほぼ間違い無くオルコット女史だろうな」

最も魔石を入手し易いであろう資産家の情報は重点的にマークして いたがよもやこんな近くにいようとは。

「でも、オルコットさんとバトルした時には全く反応が無かつたよね？」

「恐らくあの時までは手元にはなかつたのだろう…謎フードの男の事もある。」

先程、学園内の監視カメラに一瞬のノイズが走つたのを確認した「その男が内部に侵入してオルコットさんを騙したって訳ね…」

「ああ、恐らく今回の暴走にも彼等が関わり、オルコットに願いを成就させる様に事を誘導した事はまず間違い無い筈だ」

「来るわ！」

「！考察は後回しだな。いくぞ！」

まずは奴が取り込んだブルーティアーズの武装を全て叩き落とす。すると奴は水龍を象った砲撃武装を具現化させ此方へと向けてきた。

「散開！」

すぐに散開し、勢い良く放たれた水の砲撃を回避した。

「」

次に奴は叩き落とした筈のBT武装を出現させた実体剣に纏わせ振るってきた。

振るわれるごとに同時にBT武装からも攻撃が放たれる。

「ええ!?」

「ヤベ！『シングルギア・ガードウイング』！」

俺は急いで狐夜音を守る様に片翼を展開し攻撃を分散させる。が…

「何ッ!?…」

「一夏!…」

「…コレは!…」

俺は直後急に機体のガタを感じ急いで把握する。

なんと防御に使用した片翼の一部から鎧付き初めていたのだ。

「成程…あの特徴的なキヤノンにブレイドといい、俺のギアの翼を鎧付かせた攻撃といい…魔石『ディープブルー・サファイア』に封印されし魔王級水鎧龍型ジユエルガイスト、ブルースパイラルドラゴナイターか！」

水を司る龍が青き雲であるブルーティアーズを取り込んで己が力の糧としたか！」

ジユエルガイストの正体が判明した所で俺は鎧付いてしまつた片翼を即座にパージしブルースパイラルドラゴナイターに破片をぶつけた。

「ギヤアーー!?

「狐夜音!」

「OK!」

ギアの破片をぶつけられ奴が一瞬怯んだ隙に俺の指示を受けた狐月音が妖刀による刀撃を繰り出し更にダメージを与える。

「[魔弾]！」

続け様に技を奴の腹部に浴びせ穴を空けると取り込まれていたオルコットの姿が露わとなつた。

「今助けるぞ！」

だがその前に…

俺はオルコットを救出する為手を伸ばした。

その際に人工緋赤眼の力を使い感応力を上げ彼女の魔石を通して同調していた。

歪んだ願いを浄化させ純粹なる本当の願いへと変えねば彼女を救えないからだ。

「さあ、教えてくれオルコット、お前の持つ本当の願いを！」

S i d e セシリリア

「…私は?…」

ふと目覚めると私は真っ白い空間にいた。

「ウツ!…」

思い出した!…確か謎のフードを被つた男性に諭されて両親の形見を手に叶えるべきではない願いを叶えてしまおうとしてそれで:「はつ! 只の威張り屋の小娘如きがこの私の力を下らない願い事に使おうなんざ片腹痛いね!」

「あの貴方は?…」

私の目の前に突如、とても綺麗で透き通つた蒼い髪を持つ女性がいた。

「私? 私はお前に憑りついたお前達人間が言う所の化物の一匹さ!」

「私に憑りついた:化物?…」

「そ! でもお前の持つ力は私と相性が良かつたみたいだし。封印されてから久し振りに人間界に出れて物凄く暴れたい気分だつたんだ」

「!? あれが貴方の姿なのですの?…」

自身の事を化物と名乗つた女性は指をパチンと鳴らすと目の前に映像を出してきた。

それは異形が好き勝手にアリーナ内で暴れ回つていた光景だつた。
「やめろー!」

「お、織斑さん!？」

織斑依秋が騒ぎを聞きつけ駆け付けてきて私に憑りついた異形と交戦に入つていた。

「がつ!…」

「キヤアアー!」

でも異形には全く以て歯が立たず逆に返り討ちに遭つてしまい彼は氣絶させられてしまつていた。

「全く私等には効かないね」

「そんな!…」

I Sの絶対防御をも斬り裂く攻撃までもが効かないとは成す術がないのか…。

「!…チツ! 結界が張られちまつたか…よもや此処にも僅かながらの

ジエムマスターがいやがつたか…

「ジエムマスター？」

私は彼女の言つた言葉が理解出来ずにいたが映像を見てアリーナの周囲に居た生徒達が一斉に倒れていた。

だがその中で唯一倒れる事無く異形との交戦に入った人物が現れた。

もう一人の男性I-S操縦者である鍛岸さんとその恋人といつた弓花さんだつた。

「チツ！奥の手も躱されたか…」

私のブルーティアーズの武装をも使い彼等を追い詰めようとするが彼等は全く意に介さず攻撃をし続けていた。

「グツ!…」の魔王級ジュエルガイストである私がたかだか二人のマスターに気押されるだと!…

気付くと彼女はかなりの後退りをしていた。

「この!…がはあー!?

弓花さんの繰り出した技を異形が受けた直後、彼女も先程より大きく吹き飛ばされていた。

「しまつ!…あの野郎、私が強制的に結んだお前との力のバスに介入してきやがつただと!…」

『オルコット、今助けるぞ!

お前の本当の願いを言うんだ!』

私がこの異形の力に振り回されていた事に気が付いてくれていたのか鍛岸さんは私に向かつてそう告げてきた。

思えば何時からこんなにも歪んだ考えを持ち得てしまつたのだろうか…。

いつもいつも厳格だつた母にペコペコと低姿勢でいた父を情けなく思うようになつてしまい中学の時に列車事故で両親が他界してからというもの私の残されたものというのはオルコット家の莫大な遺産と偶然にもたつた一つだけ唯一両親の返り血が付着しなかつた美しい輝きを持つ蒼い宝石のみだつた…。

思い返してみればその宝石は父が昔母に一年目の結婚記念日に購

入しプレゼントした物凄く思い出の深い宝物だと本人達から聞かされた事を思い出していた。

そしてその時に父が私に言つた言葉も同時に思い出す。

『セシリ亞、この宝石の様に例えどんな世界になつていつたとしても正しき誇りと優しさという美しさを忘れずにいてくれ。

お前もまた私達の大切な娘なのだから！…』

そう：父も母もまたオルコット家を支え私という宝物を守るのに必死になつていた事にようやく気が付かされた。

「わ、私の本当の願いは…」

「や、やめろー！ 言うんじゃねえー！…」

異形の女性がそう言つて脅してくるが私の覚悟は既に強い意志で決まつっていた。

「父と母が…両親が守ろうとしていた正しさを私も守れる様に強くなりたい！」

「やめてくれー！…」

私が本当に叶えたい純粹な願いを告げると空間にはいくつもの亀裂が生じ段々と崩壊をし始める。

「『その手を伸ばして掴め！』

「あ…」

私は鍛岸さんが差し伸べてくれた手を掴んでこの世界から解き放たれ再び視界が暗転した。

S i d e 一夏

「ふうー… [ギアドラゴブレス] – !

無事にオルコットを魔石の呪縛から解放し終えた俺はジユエルガイストの再封印処理を施していたのだが。

「ム？ これは…どういう事だ？…」

「え？」

処理を施したディープブルーサファイアが突如浮遊しオルコットのI S待機状態であるイヤリングに向かつて飛来し結合する現象が起きたのだ。

この不足の事態に俺達は頭を抱えるしかなかつた。

そしてもう一つ頭痛の種がやつってきた。

「そこでおとなしくしていてもらおうか。

鍔岸、弓花これは一体どういう訳なのか説明を求める」

「…」

結界も解けていたおかげで元賢姉殿が数人の教師部隊を引き連れて俺達の周囲を包囲していた。

E P IX 「願いの守護者と予期せぬ再会 前編」

S i d e 一 夏

「…」

「説明して貰うぞ」

つたくなんで、こうも次から次へと面倒事を増やしてくれるんだよ
このアホ共は…。

「アンタ達に説明出来る事など何も無い！…只今回の様な事があつて
I S 部隊を出されたとしても足手纏いでしかないから手を出すな！
良いな？」

「何？それはどういう事だ!?」

「これで失礼させて貰うぞ。先に行つておくぞ狐夜音」

「な、おい待て！…」

俺はさつさとその場から退散した。

S i d e 狐夜音

「ああもう！一夏つたらしようがないんだから…」

組織から言われていた事を忘れている訳じやないだろうけど…こ
うなつたら私から話すしかないようね。

「では、この学園の理事長先生をお呼び下さい。

そこで全てお話しします。

ですが一夏が言つた通りそれでも貴方達に出来る事は何もありま
せんよ」

「…分かつた話せ」

何處かまだ納得がいかないといった様子の織斑先生の様子を見て
私は未だ一夏が彼女を嫌う理由が改めて分かつた気がした。

（理事長室）

「ふむ…特別な宝石に封印された未知の怪物ジユエルガイストです

か

「はい」

私は琴代さんも呼んで魔石の力「願いを叶える」という部分のみ伏
せて先生達に話した。

この事が無闇に一般人に知られればそれこそ血を見る争奪戦が引き起こされてしまうからだ。

それに魔石を使おうとする者の心の力が弱ければ今回の様に暴走を引き起こしかねない。

勿論皆はこの事を聞き各々驚いていた。

「その怪物への唯一の対抗策が貴方方ジエムマスターの力もしくは銀を介した武器ですか…」

「そういう事になりますね。

例え低級のガイストであつても既存のISの装備では全く歯が立ちません」

「ならばその魔石とやらを渡せ。

此方で解析をかける」

「それは無理だと思つて下さい。

魔石はマスターである私達の物であつて所属する組織の所有物でもあるのですから。

かのオッペンハイマー卿がそれだけの理由でお許しになるとは到底思えませんわね」

「何?」

「一体どういう事よそれは!?

「そうよ世界最強のISが怪物如きに負ける訳ないわよ!」

織斑先生はそれを聞き訝しげな表情をし、彼女を盲信的に支持する女尊男卑派の教師共が騒ぎ立ててくる。

「まあ、たかだかISという欠陥パワードスーツの限定閉鎖的な称号を持つただけという貴方じや我が組織の首領に並び立てると思うのがそもそももの間違いでもありますけどね。

ねえ、ブリュンヒルデさん?」

「なんですって!?

有象無象の声は無視し私は思考する。

何も知らない他人からしてみれば卿は只の魔石を独占する組織のトップの卑怯者なのかもしれない。

その分、フルブライトや一部の者の反感を買つてしまつている事は

事実ではある。

でも彼はジユエルガイストの危険性や魔石その物に内包された力の危険性を十分に理解出来ているからこそ「全世界の魔石を管理する」という役目を自ら買って出ているのだ。

そしてそれは彼に付き従う私達が良く理解している。

「弓花さんの言つている事は全て事実だと思います…私が指揮していたI S部隊も恐らくその怪物であろう一匹に全滅を強いられました。絶対防御もことごとく突破され中には死者も出てしました…」

「なんですか？」

確か一夏の事を嗅ぎ回ろうとした暗部の一族である更識会長でしたつけ？がそう告げると教師陣は驚きを隠せない。

成程ね…駄獣モデケの件の時にI S迎撃部隊が出撃ていたってのは一夏から聞いていた。

彼女もあの場に居たのね。

「お疑いでしたら他の皆さんに話を聞いてみて下さい…只思いの他傷が深いのでそれはお勧め出来ませんが…」

それに我々更識がこの件に協力出来る事は限り無く無いでしょくな…」

「それは一体どういう事です？」

「簡単な事ですよ…といつても私にもたつた今しがたその理由が分かりましたが…弓花さん達の所属する組織のトップに君臨するのはあの鉱物界で有名なオツペンハイマーの一族」

「そう、我がカルテルを敵に回すという事がどういう事だかようやく理解出来たか暗部の小娘よ」

琴代さんがようやくかと言わんばかりに補足する。

「ええ…」

「成程、もしもそんな人物の怒りを買っててしまえば一体どうなるか大体の想像がつきますね…」

「どういう事ですか理事長？」

理事長先生もすぐに思い当たつたようだ。

「考へてもみたまえ諸君。

相手はとてつもない巨大な組織を率いていて尚且つ鉱物という業界では世界最大級のシェアを誇るといつても過言ではないとてつもない富を持った人間の一人だ。

もしその彼の一言で日本に輸入される筈の鉱物資源が出回らなくなってしまうれば国内の経済がどうなってしまうかぐらいは想像がつくだろう！」

「そ、それは…」

理事長先生に強く言われ織斑先生や女尊男卑派の連中はようやく理解出来たようだ。

「良いですか？もしですよ、鉱物類が日本に入つて来なくなつたらISは愚か他の生活関係の企業にもその影響が出て国内の経済が立ちいかなくなつてしまつて事になるんですよ！」

現在では資源にはかなり乏しく厳しい日本は世界各国の輸入に頼り切るしかない現状で大元のシェアを持つ卿の一言でそれがストップしてしまえばほとんどといって鉄などの金属等を扱うIS業界は愚か他の生活関連企業にまで経済制裁という名の影響を受けかねないのだ。

それだけはなんとしてでも避けたい筈だ。

だが卿も魔石絡みでない人の業が生み出した過ちなら人自身が修正すべきとの考えを持つているが自らがその火付け役になろうとは思つてはいない。

ましてや無闇に無関係の者達を巻き込む事は絶対にしないと断言出来る。

「ではその怪物絡みの件は貴方方に一任するしか無いって事で良いですか？」

「はい」

「…」

理事長がそう提案するがまだ女尊男卑思想が媚びり付いている者は納得はしていない様子だ。

だが奴等の唯一の弱点がとても高価な銀という代物である以上お

いそれととても一決で学園に搬入出来る物ではないと理解したのか
押し黙つていた。